

第 9 回 全国海外子女教育国際理解教育研究協議会・中国ブロック広島大会 第 21 回 広島県国際理解教育研究大会

大会テーマ：地球的・世界的視野をもった国際理解教育の推進

日 時 平成 2 8 年 8 月 1 9 日（金）
会 場 東広島芸術文化ホール くらら（小ホール）
主 催 全国海外子女教育国際理解教育研究協議会
広島県国際理解教育研究協議会（広国研）
共 催 （独）国際協力機構 J I C A 中国国際センター
後 援 文部科学省、（公財）海外子女教育振興財団、
広島県教育委員会・岡山県教育委員会・山口県教育委員会
鳥取県教育委員会・島根県教育委員会・東広島市教育委員会
国際連合訓練調査研究所（ユニタール広島）

< 報 告 >

上記の大会が東広島芸術文化ホールくららで開催されました。

午前中に行われた分科会では、3 分科会に分かれ、実践報告や発表による交流や研究協議、質疑応答などが行われました。岡山県からは第 3 分科会「海外子女教育」で岡山市立大元小学校の清野光輝先生が「青島日本人学校の取り組み」と題して、中国での実践報告をしました。（分科会報告参照）

午後に入り、ワークショップでは J I C A でセネガルに派遣された先生の実践報告がありました。自分が学ぼうという気持ちで現地の人と一緒に生活し、できるだけ現地の人と衣食住を共にしたそうです。その中で、「私たち（現地の人）は、いつも食事を用意して待っていたが、彼ら（外国人）は仕事が終わるとさっさと帰ってしまった。しかし、あなたは一緒に食べて、一緒に生活してくれた。それが嬉しかった。」と長老が言われていたことが、とても印象的でした。

その後はアトラクションとして、コロンビアで教鞭を執った先生によるケーナを初めとした南アメリカの伝統的な楽器による演奏がありました。ケーナには楽譜が存在せず、教えてもらった曲を楽譜におこしながらそれをためていったそうです。

パネルディスカッションでは、国連訓練調査研究所・ユニタール広島職員のベリン・マッケンジーさん、広島県国際理解教育研究協議会副会長の林万青也さん、JICA 中国国際センター日比俊文さんをパネリストにお迎えしてのグローバル人材育成についての意見交換が行わ



れました。その中で、グローバル人材とは？というテーマで、マッケンジーさんは、「人であるということを認め合う。世界で起こる様々なことに目を向けるべき。他人事ではなく、同じ”人間”が起こしているということをもっと認識しなければならない。そして多様性を認め合うこと。私たちには何ができるかを考えて行動することが求められるのではないか。」と意見を述べていました。

最後に文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官の直山木綿子先生による記念講演が行われました。

講演の中で、「海外に行って日本に帰らないと意味がない。外国の文化に出会って、改めて日本を見直すことが必要である。英語の力を身につけるだけではダメ。それを使ってどんなことをしたいのかが必要である。」と述べ、5・6年生で使っている”Hi friends!”もその意味が込められた内容になっていると説明しました。

また、「教師は英語が苦手なら勉強する、使わなければ力につかない。簡単なほめ言葉から使う。フレーズを繰り返す。そうやって勉強していきましょう。」「自分の意見を積極的に言えることがグローバル人材の要件の一つ。外国語だけでなく、日本語でも言えるようになっているか？そう考えると、言語活動がとても大切です。」と言われていました。

そして、英語の教科化が決まった中で、デジタル教材を市町村の教育委員会までは配布しているそうで、しっかり外国語活動の研修をして欲しいと訴えておられました。

しっかりと伝えることは伝え、データを根拠にした説得力のあるお話とともに、関西弁のユーモアあふれる言い回しがとても楽しく、あっという間の講演でした。

(分科会報告)

2本ある中の1本目として、岡山市立大元小学校の清野先生が登壇されました。

中国や青島についての概要説明、青島ビールや行事、空気汚染や反日デモなど、日本でも取り上げられる話題について画像を提示して説明されました。そして、日本人学校での年間行事や一日の流れを紹介。また、日本人学校の中で先生がしてこられた様々な足跡について紹介。危機管理マニュアルの作成や校務分掌等の再分担、分掌の上で教頭を務められたことについてお話をされました。質疑応答では、「学校内をかえていくには、実際どのようにされたのですか？」と質問され、同僚との話し合いの中での問題提起、そして話し合い、また問題提起、話し合い・・・その繰り返しでしたと答えられていました。



